

第2節 「屋根裏の散歩者」における視線描写 — 「覗き」を中心に —

はじめに

「屋根裏の散歩者」は「倒叙探偵小説」という手法を取り、三人称の語り手を使って、犯人郷田の心理描写を中心に描く幻想的な雰囲気を持つ作品である。作品の最初における郷田の性格描写から見れば、彼は犯罪に強い関心を持ち、また自分の姿を隠して、覗き見を通して他人の秘密に触れることが好きである。何事に対してもすぐ興味を無くしてしまう郷田はなぜ覗き見という行為に異様な魅力を感じているのか。この一節では覗き見という視線の分析を通して「屋根裏の散歩者」における身体描写を考えたい。

まず視線の解釈について、廣野由美子は『視線は人を殺すか—小説論 11 講』の「はじめに」において次のように述べている。

視線とは何か。それは「外界の光点と網膜上にあるこれの像とを連ねた直線」と、『広辞苑』では定義づけられている。つまり平たく言えば、「対象と、それを見る人間の目とを結ぶ線」ということになるが、その線はもちろん想定上存在するのであって、目には見えない。しかし、方向性を持った現象で、特定の時間・空間内で生じるという点では、それは「出来事」であるとも言える。視線は、それを投げかける人間、あるいは投げかけられた人間に、さまざまな意味を読み取らせ、心理的作用を及ぼし、さらには相互の関係をも変えうる可能性を孕んでいる。それゆえ視線は、変化を引き起こすエネルギーを含んだ力学的現象であると考えられる¹。

上述の解説によると、視線は人と人が相互に認識し、心の奥を探究する一種の力であり、さらに視線も人間の心理に変化を及ぼすことがあるので、視線の分析は人間の心理を探究する一つの方法と言える。また視線と小説の関係について廣野は次のように補足説明している。

¹ 廣野由美子『視線は人を殺すか—小説論 11 講』、ミネルヴァ書房、2008年、p.2。

ことに、もっぱら人間を描く文学ジャンルとして誕生した「小説」では、登場人物の目の表情や視線の動きを描写することによって、人間の心の奥に潜む「見えないもの」を暴き出す試みが、これまでに飽くことなく続けられてきた²。

以上の引用が示すように、目や視線の動きを通して、人間の心に隠れる「見えないもの」を探究することができる。「屋根裏の散歩者」の場合、主人公の郷田三郎は犯罪行為に特に興味を持ち、中でも屋根裏から覗き見するという行為が最も好きである。覗き見という異様な視線は彼の心の奥に潜んでいる犯罪欲と何か関連性があるか、この一節では覗き見という視線の分析を通して、犯罪者の郷田の心に隠れている欲望について論じたい。

1. 視線から見る犯人郷田三郎の犯罪欲

1.1 都会の中の孤独者

本作品の犯人郷田三郎は世の中をつまらなく思い、どのような職業も遊戯も彼を満足させることができないような飽き性の人である。一つだけ彼の関心を惹けるものは犯罪行為である。明智小五郎と知り合う前の郷田は、世の中に飽きてしまい、「こんな面白くない世の中に生き長えているよりは、いっそ死んで了った方がましだ」(p.498)と考えたこともあるが、自殺をはかることなく、まだ生き長らえている。それは郷田に自殺する勇気がないからか、それとも世の中にはまた彼の心を惹く事物があるからか、いずれにしても郷田は飽き性のために住居を転々として暮らしている。

そして彼は、「仙人の様に山奥へ引込んで見たこともあ」(p.498)るが、最後は「都会の燈火に、雑沓に、引寄せられる様に、彼は東京へ帰ってくる」(p.498)といった具合で人の少ない山奥の生活に慣れず、結局、雑沓な都会に戻ってしまうのである。都会は人口が多く、住宅の空間も狭いため、人と人の接触のチャンスが多く、交流も頻繁である。それにどこを歩いても、他人の目から完全に自分の姿を消すことはできない。郷田が頻繁に住所を換えることから、一見、他人と深く係わることを避けているように思えるが、実は彼は最も多くの人と接触している。そのため、郷田は一見、都会の中の孤独者のようであるが、実

² 注1 前掲書参照、p.3。

は彼は心の通じ合う友達や面白い事物をずっと探し続けているのだろう。

深い倦怠感の中で、郷田は明智小五郎と知り合いになった。二人とも犯罪行為に興味を持ち、二人の友人関係はその共通する興味のもとに成立していると言える。郷田は明智の性格や博識に惹かれ、また明智からさまざまな珍しい犯罪の話の話を聞いていた。この出会いにより郷田は心に潜んでいる犯罪的衝動を呼び起されたのである。

1.2 郷田が犯行をためらう理由

明智と知り合った過程から見れば、郷田が犯罪行為に非常に憧れていることがわかる。しかし、郷田には犯罪行為を実行する勇気がない。その理由について、次のような一節がある。

併し、いかな三郎も、流石に法律上の罪人になることだけは、どう考えてもいやでした。彼はまだ、両親や、兄弟や、親戚知己などの悲嘆や侮辱を無視してまで、楽しみに耽る勇気はないのです。それらの書物によりますと、どの様な巧妙な犯罪でも、必ずどっかに破綻があって、それが犯罪発覚のいと口になり、一生涯警察の眼を逃れているということは、極く僅かの例外を除いては、全く不可能の様に見えます。(p.500)

この一節から、郷田が犯罪の実行をためらっているのは、犯行がばれて法律に裁かれる可能性があるからである。「法律上の罪人」になったら、「親戚知己」を悲しませることは勿論、彼らからも軽蔑されるに違いない。悲嘆にしても侮辱にしても、人に見下されるような視線はこわい。このように郷田は自分が他人より劣っているという状況に陥ることが耐えられないのである。

また、犯行がばれたら一生警察の目から逃れなければならない。犯行が暴露したら、必ず法律の裁きを受けなければならない、郷田が犯行をためらう理由はここにある。つまり、「発覚を恐れる為にその「犯罪」を行い得ない」(p.501)郷田は、犯罪行為に興味を感じながらも、それを実行するまでの勇気を持たずにいたのである。勿論、これは犯罪が罪であるという道徳的思考によるものではなく、他人から蔑視されることを恐れて、また捕まる可能性があるからである。

1.3 犯罪の「真似事」－尾行・覗き・変装

前述のように、郷田は犯罪をためらったが、犯罪の「真似事」だけなら、法律の裁きを受ける心配はなく、それで彼は犯罪の「真似事」を始めてみたのである。郷田が実際に行った犯罪の「真似事」は以下のような行動が見られる。

彼はそこへ（筆者注：浅草）出かけては、活動小屋と活動小屋の間の、人一人漸く通れる位の細い暗い路地や、共同便所の背後などにある、浅草にもこんな余裕があるのかと思われる様な、妙にガラんとした空地进行を好んで迷いました。そして、犯罪者が同類と通信する為でもあるかの様に、白墨でその辺の壁に矢の印を書いて廻ったり、金持らしい通行人を見かけると、自分が掏摸にでもなった気で、どこまでもどこまでもそのあとを尾行して見たり、妙な暗号文を書いた紙切れを――それにはいつも恐ろしい殺人に関する事柄などを認めてあるのです――公園のベンチの板の間へ挟んで置いて、樹蔭に隠れて、誰かがそれを発見するのを待構えていたり、其外これに類した様々の遊戯を行っては、独り楽しむのでした。（p.501）

上述の引用にあるように、「犯罪者が同類と通信する為でもあるかの様に、白墨でその辺の壁に矢の印を書いて廻ったり、そして「自分が掏摸にでもなった気で」金持ちらしい通行人を尾行したり、さらに「妙な暗号文を書いた紙切れを――それにはいつも恐ろしい殺人に関する事柄などを認めてあるのです――公園のベンチの板の間へ挟んで置いて、樹蔭に隠れて、誰かがそれを発見するのを待構えていた」りするなど、郷田はさまざまな犯罪の「真似事」を楽しんでみたのである。これらの真似事の共通点としてまず自分の姿を隠す必要がある。郷田は自分の姿を隠して、通行人を観察することが好きである。郷田はこのように尾行・覗きなど犯罪の真似事を通して自分の犯罪欲を満足したのである。

また、郷田は暗いところに隠れて他人を観察することが好きだけでなく、彼は変装などして自分の身分を隠して、他人を翻弄することも好きである。この変装の部分は郷田の心理を分析する重要なポイントになるので、次の第3節「屋根裏の散歩者」における人物造形」で取り上げて論じることとする。

以上に見てきたように、郷田は覗き見や変装、尾行など犯罪の「真似事」をして楽しんでしたが、彼は次第にこれらの行動に興味をなくした。この部分に

については次のような描写がある。

併し、これらの「犯罪」の真似事は、ある程度まで彼の慾望を満足させては呉れましたけれど、そして、時には一寸面白い事件を惹起しなぞして、その当座は十分慰めにもなったのですけれど、真似事はどこまでも真似事で、危険がないだけに——「犯罪」の魅力は見方によってはその危険にこそあるのですから——興味も乏しく、そういつまでも彼を有頂天にさせる力はありませんでした。(p.502)

この一節が示すように、犯罪の魅力は、他人に発覚される危険の中で刺激感が増幅される。しかし、犯罪の真似事は他人に発見されても、しょせん真似事であり、本当の犯罪ではないので、法律に裁かれることはない。背負うリスクが違うので、真似事ではもう彼を満足させることができなくなっていた。他人に発覚される恐れがあるからこそ、味わえる刺激感も格別であり、それで郷田がさらに強い刺激を追い求めるのもはや時間の問題である。

2. 視線における空間性

以上に見てきた通り、郷田は次第に犯罪の真似事に興味をなくしたが、新しく借りたマンションの東栄館の部屋でまた別の楽しみを発見した。それは自分の部屋の押し入れの中から、自分の部屋を覗き見ることと、屋根裏を「散歩」して、他人の部屋を覗き見ることである。ここでは、この二つの覗き見の視線の差異を分析して、「屋根裏の散歩者」における視覚描写について論じてみたい。

2.1 押し入れの空間性

東栄館に移ってから、郷田は狭い押し入れに入り込んで寝る楽しみを覚えた。そして、押し入れの中から部屋の様子を覗いてみると、いままで経験したことのない異様な感覚にとらわれた。郷田が押し入れの中から自分の部屋を覗き見る時の感想について次の一節がある。

襖をピッシャリ締め切って、その隙間から洩れて来る糸の様な電気の光を見ていますと、何だかこう自分が探偵小説の中の人物にでもなった様な気がして、愉快ですし、又それを細目に開けて、そこから、自分自身の部

屋を、泥棒が他人の部屋をでも覗く様な気持で、色々の激情的な場面を想像しながら、眺めるのも、興味がありました。(pp.504-505)

郷田は犯罪の真似事に対してもう興味をなくしたが、以上の引用があるように、覗き見にはまだ興味を示している。そして押し入れの中から部屋を覗き見る場面は浅草で他人をこっそり観察する場面と明確に異なっている。郷田が浅草で他人を覗き見る時は、姿を樹蔭など暗いところに隠していたが、観察する対象と自分とは同じ空間を共有している。しかし押し入れに隠れて隙間から外の世界を覗き見る時、自分の存在している空間と、覗き見をする対象物の空間とは押し入れが一つの区分となり、二つの異なる空間を形成している。

押し入れの中に隠れて自分の部屋を覗き見るのは別に犯罪行為ではないので、郷田は三日目あたりになると厭きてしまったが、押し入れの中の空間は、外の空間とは異質の空間で、これは今まで体験したことのない闇の空間である。この空間の差異性を興味深く思った郷田は、もう一つの覗き行為に走ったのである。

2.2 異世界としての屋根裏の空間性

郷田は押し入れの中から自分の部屋を覗くことに対して興味をなくしたが、彼はすぐもっと面白いことを発見した。それは屋根裏に潜り込むことである。最初は天井板に手で突っぱって持上げてみたが、その上から「何者かが上から圧えつけている様な手ごたえ」(p.505)を彼は感じたのである。そして、郷田は「丁度この天井板の上に、何か生物が、例えば大きな青大将か何かがいるのではあるまいか」(p.505)と気味悪く感じていた。好奇心に駆られて、郷田はもう一度手で押してみると、屋根裏の入り口が彼の目の前に開いたのである。

ここでは特に青大将という生物の比喩に注目したい。青大将は日本特有の蛇の一種である。富田京一著『山溪ハンディ図鑑 10 日本のカメ・トカゲ・ヘビ』によると、青大将はネズミなどの獲物の生息環境に対応して、家の周辺でよく活動し、山奥などではあまり見かけない。昼行性で、活動する時間が人々の活動時間と重なることが多いため、人との関わりが深く、人とともに暮らす蛇と言われる³。「屋根裏の散歩者」において青大将が喩えとして取り上げられてい

³ 富田京一『山溪ハンディ図鑑 10 日本のカメ・トカゲ・ヘビ』、山と溪谷社、2007年、pp.154-159。

るのも、この蛇の習性によるものと思われる。このように人の生活に深く係りのある動物なので、屋根裏に実際に潜んでいたとしても不思議ではない。

青大将のこともそうであるが、屋根裏の光景に関する描写においても蛇の比喩が使われている。例えば「先ず目につくのは、縦に、長々と横えられた、太い、曲りくねった、大蛇の様な棟木」(p.507)、「そして、その棟木と直角に、これは大蛇の肋骨に当る沢山の梁が両側へ、屋根の傾斜に沿ってニョキニョキと突き出てい」(p.507)るなど屋根裏の棟が蛇に喩えられる。郷田はまた蛇が存在するような屋根裏の空間に対して、「これは素敵だ」(p.507)と思っている。何か人外のもの、蛇の類いの生物が存在するような空間は、郷田の心を惹きつける魅力があることをまず指摘しておきたい。

郷田は屋根裏に潜り込むようになってから他人の生活を覗く毎日が始まった。この覗きの体験については次のような描写がある。

どうしてまあ、こんな手近な所に、こんな面白い興味があるのを、今日まで気附かないでいたのでしょうか。魔物の様に暗闇の世界を歩き廻って、二十人に近い東栄館の二階中の止宿人の秘密を、次から次へと隙見して行く、そのこと丈けでも、三郎はもう十分愉快なのです。そして、久方振り、生き甲斐を感じさえするのです。(p.509)

上述の引用が示すように、郷田は自分が魔物と化したような感じて、屋根裏の暗闇世界から下の日常世界を覗き見ることに快感を覚えている。さらに「生き甲斐を感じさえする」(p.509)ほど、久しぶりに充実とした存在の実感を感じた。その充実感の理由の一つに他人の秘密を「隙見」することにある。郷田が触れたほかの住民の秘密については、次の小節で取り上げて論じることとする。

また、屋根裏を散歩しているときの郷田の姿について次のような一節がある。

夜更けなど、昼とは違って、洩れて来る光線の量が極く僅かなので、一寸先も見分けられぬ闇の中を、少しも物音を立てない様に注意しながら、その姿で、ソロリソロリと、棟木の上を伝っていますと、何かこう、自分が蛇にでもなって、太い木の幹を這い廻っている様な気持がして、我ながら妙に凄くなって来ます。(p.510)

この一節が示すように、郷田は自分が普通の人間と違って、蛇のような生き物になったような感じで、暗闇の異世界から下の人間世界を覗き見る。この時点において、郷田のいる屋根裏の空間はもう普通の世界と分離していると言える。そして、この屋根裏という異世界は郷田にとって、本論第2章で取り上げた「人間椅子」で論じた椅子の中の世界と似ている。椅子の中の世界は〈私〉にとって一つの理想郷であると同様に、この屋根裏の世界が郷田にとって一つのユートピアと言える。

3. 覗き見の視線とその意味

3.1 縦の視線の映像体験

屋根裏から下の部屋を見下ろすとき、水平の視線は縦の視線となり、郷田は上から下を俯瞰する風景を獲得したのである。この上から下に向ける視覚性について、高橋世織は「乱歩文学における〈触覚=映像〉の世界」において次のように論じている。

『屋根裏の散歩者』や『陰獣』における、天井裏=屋根裏という闇の〈死角〉空間に身を潜めて、その節穴から光に照射されたプライベートで無防備きわまる私生活や姿態を覗き見るという図柄は、いかにも奇態きわまる着想のようだが、実は当時一九二〇年代の大衆、都市生活者が可能となった新しい視覚体験の本質を構図・構造化したものに他ならない。つまり、映画という視覚的欲望体験である⁴。

高橋の言によると、この俯瞰する視線は、1920年代における映画による視覚体験と深い関係にあるということである。高橋はさらに次のように補足説明している。

我々の通常の世界の見方、見え方はすこぶる遠近法的な奥行き・パースペクティブに支えられているが、天井裏からのエア・ショットは、今日相撲やドームなどの天井からのカメラ・アイによるスポーツ実況などで使われているので、少しはなじみのものとなっているが、頭上部のみが極度に

⁴ 高橋世織「乱歩文学における〈触覚=映像〉の世界」『国文学解釈と鑑賞』59、「江戸川乱歩の魅力—生誕100年〈特集〉」、至文堂、1994年12月、p.141。

中心化された、我々が幼少期から学習し、固定されたおなじみの人型像とはおよそかけはなれたものに一変してしまっているものである。しかもパースペクティブ的な距離の要素が消滅した、ベタ一面の平面性の視線に変換されてしまったものである⁵。

高橋世織の解説によると、我々は普通に水平の視線で事物を見る時、目に映るのは遠近法のある映像である。しかし、上から下を見る縦の視線に変わった場合は、その映像が垂直の平面世界になる。この解説にあるように平面性の視線は普段見慣れた視覚表現ではない。そしてこの視覚性の変換は郷田にとって、すこぶる新鮮感がある。このような常軌を逸した視覚の描写は「屋根裏の散歩者」に色濃い怪奇性を与えていると言えよう。

3.2 他人の生活を覗き込む視線

郷田が屋根裏から覗き見る時、観察対象者の行動について「何事もなくとも、こうした興味がある上に、そこには、往々にして、滑稽な、悲惨な、或は物凄い光景が、展開されてい」(p.511)ると感想を述べている。そして、郷田が覗き見る対象は普段の行動と違う一面を呈している。ここでは郷田が覗き見る対象と彼らの行動を整理し、以下に表(一)として提示する。

表(一) 郷田が覗き見る対象者と彼らの裏の一面

※筆者作成

覗き見る対象	人に知られていない一面
反資本主義の会社員	①貰ったばかりの昇給の辞令を折鞆から出したり、しまったり、幾度も幾度も、飽かず打眺めて喜んでいる。(p.511)
相場師	①ゾロリとしたお召しの着物を不断着にして、果敢ない豪華振りを示している。(p.511) ②いざ床につく時には、その、昼間はさも無雑作に着こなしていた着物を、女の様に、丁寧に畳んで、床の下へ敷く。(p.511) ③しみでもついたのを見えて、それを丹念に口で嘗め

⁵ 注4 前掲論文参照、pp.141-142。

	る。(p.511)
大学の野球選手である ニキビ面の青年	①運動家にも似合わない臆病さを以て、女中への附文を、食べて了った夕飯のお膳の上へ、のせて見たり、思い返して、引込めて見たり、又のせて見たり、モジモジと同じことを繰り返している。(p.511)
身分が記されていない 止宿人の人たち	A淫売婦(?)を引入れて、茲に書くことを憚る様な、すさまじい狂態を演じている。(p.511)
	B今の先まで、笑顔で話し合っていた相手を、隣の部屋へ来ては、まるで不倶戴天の仇でもある様に罵っている。(p.512)
	C蝙蝠の様に、どちらへ行っても、都合のいいお座りなりを云って、蔭でペロリと舌を出している。(p.512)
女画学生	①「恋の三角関係」どころではありません。五角六角と、複雑した関係が、手に取る様に見えるばかりか、競争者達の誰も知らない、本人の真意が、局外者の「屋根裏の散歩者」に丈け、ハッキリと分るではありませんか。(p.512)

以上の表(一)を見ると、郷田が覗き見る対象はすべて表向きの一面と裏の一面がある。それに、彼らの、人に知られていない一面は殆ど否定的に描かれている。例えば会社員の偽善、相場師の用心深さ、野球選手の臆病などがそうである。それらの観察対象の中で、郷田は特に女画学生の複雑な男女関係に興味を示している。「競争者達の誰も知らない、本人の真意が、局外者の「屋根裏の散歩者」に丈け、ハッキリと分るではありませんか。お伽噺に隠れ蓑というものがありますが、天井裏の三郎は、云わばその隠れ蓑を着ているも同然なのです」(p.512)との描写があるように、他人の秘密を覗き見るという非日常的な行動は郷田に大きな刺激を与え、特に人の本心に潜む黒い一面をかいま見ることが一種の悦びともなっている。

屋根裏で活動する郷田は、自分が魔物と化したような感覚に陥り、自分がまるで人間ではない、ほかの生き物になった錯覚に陥った。さらに屋根裏で映画を見るように他人の生活を覗いて、人の心に潜む悪の一面に触れて、どんなに

表で立派な恰好や振り舞いをする人でも、自分の部屋に戻ると、気が緩んで、素の自分が出てくる。郷田は覗きを通して、人々の心の闇をたくさん見てしまったとも言えるのである。

3.3 殺人者になった郷田の視線の変化

郷田は同じ下宿屋の住人である遠藤を嫌って彼を殺害しようと思いついたが、彼の殺人動機について本作品には次のような描写がある。

三郎のこの考の主たる動機は、相手の人物にあるのではなくて、ただ殺人行為そのものの興味にあったのです。先からお話して来た通り、三郎の精神状態は非常に変態的で、犯罪嗜好癖ともいうべき病気を持っていて、その犯罪の中でも彼が最も魅力を感じたのは殺人罪なのですから、こうした考えの起るのも決して偶然ではないのです。(p.516)

以上の引用を見ると、遠藤の殺害を考えたのは、彼を嫌うということよりも、本当は郷田に犯罪嗜好癖があり、殺人の衝動に駆られていただけである。そのために対象は実は誰でも良かった。そして郷田は自分の計画通り、遠藤を殺害するのに成功したが、その時の彼の気持ちについて以下のような一節がある。

想像の世界では、もうこの上もない魅力であった殺人という事が、やっ
て見れば、外の日常茶飯事と、何の変りもないのでした。この鹽梅なら、
まだ何人だって殺せるぞ。(p.529)

上述の引用から、殺人という行為は郷田にとって、言い知れぬ魅力のある行為であったが、それを実行してから、殺人も「他の日常茶飯事」と同じく味気のないものになってしまった。突然そのことを意識した郷田は「気抜けのした彼の心を、何ともえたいの知れぬ恐ろしさが、ジワジワと襲い始めていました」(p.529)と感じている。また「暗闇の屋根裏、縦横に交錯した怪物の様な棟木や梁、その下で、守宮か何ぞの様に、天井裏に吸いついて、人間の死骸を見つめている自分の姿が、三郎は俄に気味悪くなって来ました」(p.529)と死骸を眺めている自分の姿が天井裏に吸いついた守宮のように感じたのである。

郷田はどうして急に冷めてきたのか。それに彼を襲った「何ともえたいの知

れぬ恐ろしさ」(p.529)は何を指しているのか。郷田は人を殺しても自分の欲望が満足できないことを悟ったために恐れおののいたのか。それとも郷田は、自分が本当の殺人犯になったことを意識したため、こわくなっただけなのか。前の第1.3節で郷田の犯罪欲について論じる時、筆者は郷田が追い求める犯罪の刺激は他人に発覚される恐れがある中で増幅されるという結論に至った。それでは、殺人者になった郷田の心に生まれた「恐れ」とは犯行が発覚されることに対する恐れではないか。発覚される恐れがあるからこそ、犯罪の刺激感がより一層強く感じられる。

そして蛇のようにくねくねとした棟木の上で這い回るように動く郷田は殺人者になってから、棟木の下に張り付く守宮のような気分になる。蛇から守宮へと喩えが変わったことにも注意を払いたい。それに前は高い位置から他人の生活を観察していたのに、今は誰かが自分に視線を投げているのではないかと疑う。人を本当に殺した郷田は、その時から一刻も早く屋根裏の世界から脱出しようとした。そして殺人の罪を犯してから、郷田は一度も屋根裏には戻らなかった。

おわりに

この一節では、覗き見という視線描写に注目し、「屋根裏の散歩者」における視線の空間性と本作品における覗き見の様相について分析してみた。

本作品の犯人郷田は深く倦怠感を感じているが、自殺や隠居などで自分の存在を消すことはできなかった。逆に、彼は人口が多い都会が好きである。つまり郷田は都会の中の孤独者のように生きているが、実は彼は最も多くの人と接触している。

また郷田は犯罪嗜好癖の人間であるが、犯罪が発覚され、法律の裁きのリスクを考えると、それを実行することができずにいた。郷田が犯行をためらう理由を考えれば、彼は道德意識をあまり持ち合わせていない人間であることがわかる。そして法律に裁かれる恐れのある犯罪行為に彼は深く惹かれている。

東栄館に住居を移してから、郷田は屋根裏という自分の理想郷とも言える異空間を発見した。そこで郷田は魔物と化したと感じて部屋の世界を見下ろす。このように自分が屋根裏から部屋の人々を見下ろす感覚は、公園での平面的な覗き見と異なり、他人の秘密や人間性をかいま見ることのできる視線である。そしてこのような縦の視線は郷田にとって、すごく斬新な体験であり、郷田は

縦の視線を通して他人の暗い一面を覗き見たのである。

そして殺人者になった郷田の視線と心境には変化が生じた。郷田が人を殺してから、心に恐怖が生まれた。またもともと上から他人の生活を見下ろしていた視線は、今度誰かに見られているという視線に対する恐怖に変わった。

以上に述べてきたように、乱歩は巧みに覗き見という視線描写を通して、読者に斬新な視覚体験を提示している。また犯罪者・郷田三郎の微妙な心理変化も視覚の描写によって、細かく描き出されている。

